

『咸陽城東樓』 許 渾

唐朝の滅亡を予感し憂慮す

一上高城萬里愁 一たび高城に上れば萬里愁う
 蒹葭楊柳似汀洲 蒹葭楊柳汀洲に似たり
 溪雲初起日沈閣 溪雲初めて起こつて日閣に沈み
 山雨欲來風滿樓 山雨來らんと欲して風樓に滿つ
 鳥下綠蕪秦苑夕 鳥は綠蕪に下る秦苑の夕べ
 蟬鳴黃葉漢宮秋 蟬は黃葉に鳴く漢宮の秋
 行人莫問當年事 行人問うこと莫れ當年の事
 故國東來渭水流 故國東來渭水流る

咸陽について

咸陽は戦国中期時代、孝公の時に秦の都とされた。その後始皇帝は諸侯を亡ぼすことにその宮室を拡大し、宮殿の

数は二百七十にのぼた。しかし秦が亡びると宮殿はことごとこわされ、贅を尽くした阿房宮も項羽によって焼き払われ、三ヶ月間燃え続けて灰燼に帰したと伝えられている。漢時代になると街を築きなおし渭城と名付けられた。唐代には咸陽県が置かれていた。現代の咸陽は明時代の市街で往古の歴史をとどめるものはほとんどない。

作者 許渾について

七九一年生まれ、八五四年没。晩唐の詩人である。字は用晦ようかいといい、江蘇省丹陽県の人で高宗の宰相許圜師ぎよしの子孫にあたる。大和六年（八三二）科挙に合格して進士となり、山西省太平の県令（県の長官）となったが、病気のため辞職した。宣宗の大中三年（八四九）潤州の司馬から監察御史（檢察官、官吏を取り締まる役）に抜擢された。更にのち、各地の刺史（州の長官）を歴任したが晩年は郷里の丁卯橋ていぼうにあった別荘に隠棲した。特に律詩が得意で、杜牧や韋莊らに推重された。

自作の近体詩を自ら編纂した「丁卯集」二巻がある。

要旨

この詩は秦時代の都、咸陽の城樓に登って故郷を思い、かつて栄えた秦、漢に思いをはせ、唐王朝の行く末を案じて作ったものである。（教本Bその二）

意 解

ひとたび高い城樓に登って周囲を眺めると万里の故郷への想いがひき起こされる。オギやアシ、柳の連なる風景は（私の故郷）江南の川岸に似ているからだ。

谷間から雲が湧き起こったかと思うと、はや日は闇の向こうに沈もうとし、山の方から（今にも）雨が降り出しそうに、風が樓いっぱい吹き込んできた。

鳥が荒れた緑の草原に舞い降り、かつての秦の庭園は日が暮れてゆき、蟬が黄色く色づいた葉陰で鳴いて、漢の宮殿あたりには秋が訪れている。

旅人よ、昔の秦漢のことは聞かないでおくれ、この古い都で昔と変わらぬものは、東へ流れてゆく渭水だけなのだから。（教本Bその二）

考 察

この詩には解釈に諸説があるので紹介したい。

一、首聯二句目「似汀洲」について

A、この詩は秦漢文明への懐古詩であり、栄華をきわめた土地がすっかり荒れはてているさまを詠む、とする説。首聯の意解は「ふと高い城樓に登って周囲を眺めると（荒涼たる風景に）わが胸中の愁いは万里のはてまで広がる。オギやアシ、柳の連

なるさまは、まるで川辺の砂地のようで（過去の栄華のかげもない）となる。松浦友久「中国詩選（三）唐詩」等

B、懐古に望郷を重ねる説。許渾は江南の潤州の出身なので故郷を想い出す気持があった、とする説。本会はこの説にたって教本が作られている。前野直彬「唐詩鑑賞辞典」山之内正彦執筆、村上哲見「三体詩（上）」、松枝茂夫「中国名詩選」等

二、尾聯八句目「故国」について

A、秦の国都、咸陽付近とする説。

小川昭一「中国の名詩鑑賞7 晩唐」、松浦友久「中国詩選（三）唐詩」等

B、秦の発生地、隴西地方をさすとする説。

秦は隴西、今の甘肅省の天水あたりに起こり、次第に渭水に沿って東へ移り、咸陽に都してのち、始皇帝に依って天下は統一された。この説に従うと読みは「故国より東来して渭水流る」となり、八句目の意解は「秦の故地、隴西より渭水の水が昔のまま東へ流れているだけだ」となる。

村上哲見「三体詩（上）」、前野直彬「唐詩鑑賞辞典」山之内正彦執筆

三、尾聯七句目「行人」について

普通は「旅人」の意であるが、この詩では「作者自身」だろうとする解釈がある。教本詳解はこの説に基づいている。「この地を旅する人（私）は昔のことをあれこれ問うのはやめにしよう」となり、筆者もこちらの解釈がふさわしいように感じる。

鑑賞

許渾は朝廷における三年間の体験を通して、朝政の腐敗や官僚・宦官間の争いの激化、人民の生活の不安定などを深く認識した。「新選唐詩三百首」によれば、この詩は許渾が宣宗の大中年間（八四七～八六〇）監察御史に任ぜられた時の作であり、やはり唐朝の滅亡を予感し、憂慮した作品としている。

根拠その一（頷聯）

溪雲初めて起こつて日閣に沈み
山雨来らんと欲して風樓に満つ

細やかな自然の動きをよく捉え、絵画的な美しさを持つと同時に、第四句「山雨来らんと欲して風樓に満つ」は激動の到来を予告する名句として知られ、「日閣に沈み」「風樓に満つ」は大乱が今にも勃発しようとするきざしを具体的に暗示している。現在私たちも動乱や革命などが起こる直前の緊迫した雰囲気であらわす比喩としてしばしば耳に

する。

根拠その二（頸聯）

鳥は緑蕪に下る秦苑の夕べ
蟬は黄葉に鳴く漢宮の秋

（名も知れぬ）鳥が舞い降り、日の暮れ行く荒れはたた緑の草むら、あのあたりにはかつて秦の美しい御苑が置かれていた。ひぐらし・つくつくぼうしが黄ばんだ葉陰で鳴いている（あの林の）あたり、そこは秋の気配ただよう漢の宮殿の跡だ。凋落した「秦苑の夕べ」「漢宮の秋」のありさまは、大唐帝国の前途の運命に対する憂慮でもある。作者の予想通り、八五九年に裘甫の乱、八六六年龐勛（ほうくん）の乱、八七四～五年黄巢（こうそう）の大反乱が相次いで発生した。そしておよそ三〇年後に唐朝は滅んでいる。

なおこの頸聯は平安時代中期（一〇一三年）に編まれた「和漢朗詠集」に収められているのを見ると、「悠久の名詩」に値するのではないか。

鳥は緑蕪に下りて秦苑静かなり
蟬黄葉に鳴いて漢宮秋なり

第五句の「夕」はここでは「静」となっている。

最後に許渾の詩を今ひとつ付記したい。

愁 思

琪樹西風枕簟秋 琪樹きじゆの西風 枕簟ちんでん秋なり

楚雲湘水憶同遊 楚雲湘水 同遊を憶う

高歌一曲掩明鏡 高歌一曲 明鏡みやうきやうを掩う

昨日少年今白頭 昨日の少年 今は白頭

庭の美しい樹に秋風が立ち、夏の枕やたかむしろもいらなくなつた。楚の空に湧く雲、湘水の流れを見るにつけ、私はかつて共に遊んだ人たちのことを思いおこす。

そして高らかに一節の歌を歌いながら、鏡にふたをした。昨日まで若者だった（と思っていたが）今は白髪の老人となっていたから。

結句の「昨日の少年今は白頭」は何でもない表現ながら、なかなか言い得ない名句ではないか。

※和漢朗詠集

平安時代中期（一〇一三年）藤原公任きんとう編纂の歌集。もとは藤原道長の女威子むすめこ入内いりないの際に贈り物に添える歌として編纂され、のち書道三蹟の一人藤原行成に清書させたものが有名。朗詠に適した漢詩文の秀句約五九〇首、和歌二一六首が収められている。中国作家では白居易が一三六首と群を抜いて多く、許渾は一〇首である。和歌は紀貫之の二〇首が最も多い。